

また入浴と消毒をして旧軍隊の服が全員に支給され、着替えを終えて一泊、夜は大歓迎されました。翌日、実家の最寄りの駅までの切符をもらって仲間と一緒に途中の駅まで来て、手を振り元気で暮らそうとお別れをしました。そして私は一人村松駅に着きましたら、村役場の兵事係の方と部落の方々も出迎えてくれましたので嬉しかったです。

軍隊生活四年、ソ連に四年、計八年間の社会の空白が続きました。私は昭和二十四年九月一日帰宅いたしました。戦後四年を経て社会も落ち着いて、各職場には募集ありませんでした。それでも部落の人から農協の自動車の助手兼人夫に来てくれるように言われて、私も遊んでいることもできず、喜んでお願いして雇われ、頑張りました。

二年後には自動車の免許証も手にしてやっていると、農協の事業がうまくいかず解散しました。それで今度は建設会社に入社、トラックの運転手をしておりましたが、またその会社も倒産となり、隣の町の役場の建設課に入りました。そのころ、同年輩の人たちは既に

要職についており、給金も大きく差がついておりました。それでも私は、幸いに体も健康で、数年前に退職して現在は年金生活ですが、孫三人と計七人で暮らしております。

## 五十年回顧

石川県 中田 清康

### 軍隊

さて、私は昭和十六年三月、工業学校機械科を卒業し、関東防衛軍野戦建築隊（六九三部隊）軍属などを経て、敗戦の色濃きころ、在満召集により東満国境東寧付近大肚子川に駐屯する満州第七六三部隊（第十二師団輜重隊）へ昭和十九年六月十五日夜遅く入隊した。その晩は休むまで班長も助教も助手も親切でやさしかった。米田伍長殿、野口兵長殿、金子上等兵殿、その後五十星霜、今いずこに——ご健在であろうか。

その夜寝台に入り、しばらくして首筋がモゾモゾす

るので思わず手で押さえたら、南京虫が五、六匹手の平についてきたのにはまずびっくり——これが入隊初夜の歓迎であった。

翌日から早速、軍人精神をたたき込まれることになった。名にし負う荒くれ九州男児の中へ、しゃばっ気のなかなか抜け切らない年配の二國（第二国民兵）が多くまざる動作が鈍い満召集兵たちのこと）に毎日のようにビンタが飛ぶ。消灯ラッパで毛布に潜り込むまで自分が全くない。それでもようやく軍隊生活の要領を覚えた初冬の冷気身にしむころ、腹がすいてたまらず、不寝番と共謀し炊事場へ忍び込み、朝食用に仕込んであった大炊飯がまの米を飯ごう一杯すくい取り、匍匐前進で内務班へ帰り、巡回の目をかすめながらペチカに入れてようやく炊き上げ、こっそり分けて食った味は、メッコ飯だったが忘れられない。

「飯の食い方が遅い」「便所が長い」「動作がたるい」  
「……です、とは何だ」「いつまでもしゃばっ気が抜けん」「全くたるんだ」と折に触れての一斉ビンタにおびえ、気合を入れられながらようやく六カ月た

ち、十二月初旬、身を切る寒風の中を一期の検閲が実施された。

在満国策会社や軍属勤務など三、四十代の第二国民兵（私は第二乙種）が多くまじる六・一五（※六月十五日）に入隊だから、私どもはロクイチゴと呼ばれていた）は、ほとんど皆が半年間の教育召集くらいに軽く考えており、この検閲が終われば、またしゃばへ戻れるのだと張り切って臨んだ。しかし、この検閲で私の運命が左右されることになる。

#### 検 閲

検閲科目は、自動車行進中の手旗信号による伝令動作であった。我が第一中隊は九七式「いすゞ」貨物自動車を連れ、私の分隊車には若い中尉殿が検閲官として同乗、発進した。

さかのぼるが、私は軍属をしていた関係上、将校や下士官といつも普通社会（しゃば）の言葉でやりとりしていたくせが抜けず、態度が悪いと思われ、飯が遅く便所が長いとなれば内務班の成績は下の部類であった。たびたびビンタをいただいたことでそれは自覚し

ていた。そこでこの不名誉を挽回すべく、ここを先途と張り切った。かくして検閲終了。営庭に各隊長から全班長、助教、助手まで六・一五全員が整列、連隊長講評が始まった。いろいろ訓示講評の後、最後に本日の成績優秀者として全中隊で一名、何と私の名前が読み上げられたではないか。すなわち「第一中隊第一小队第二分隊中田二等兵の伝令動作は特に迅速機敏にして優秀なり」と。私は耳を疑ったが本当であった。

それからが大変、私は班長とともに中隊長（山口大尉）の室に呼び出された。小隊長（山根少尉）も同席し、中隊の名誉であるとお褒めの言葉をいただいた。照れくさかったが、内務班の言葉をいただいたのであった。班長は鼻高々、私は当番、使役は当分免除の恩典に浴した。

中隊長は私にすぐ幹候志願を勧めたが、私は前述のように教育召集とっており、自分は軍属として御奉公したい、六九三部隊は自分の帰るのを待っておりますと辞退したが、中隊長は、現在我が国は非常時期で、おまえのような優秀な兵は皇軍幹部となつてもらいた

い、また、おまえは教育召集ではないと告げられ、ようやく私も志願することになった。機械科を出ていたので技術部（兵技）幹候として採用された。

聞くところによると、六・一五は技術屋が多く、幹候志願のほとんどが技術部志願であったが、私と第四中隊の水野と二人だけが採用されたことであつた。幹候合格者は合計百名であり、私と水野以外の九十八名は一般兵科であつた。このことが後に命拾いすることになる。

直ちに幹候隊として全連隊一カ所に集められたが、兵技の二名は別扱いであつた。兵科九十八名との教練も除外され、兵器庫勤務で、毎日銃器の手入れをしているだけの日課が続いた。その間、兵科候補生は大変であつた。ハワイ帰りの二世という体格のよい張り切りボーイ水城某という見習士官が、昼の疲れでまだぐっすり眠っている明け方午前四時ごろ、構わず非常呼集をかけてたたき起こし、完全軍装での早朝演習を毎週必ず一、二回実施するというすさまじい鍛え方であつた。

水野と私が朝食を済ませ八時前、兵器庫へ出勤という時間に、ようやく演習を終え帰営した彼らから、「アー貴様たちはいいな」と言われ、何かまことに申しわけのないような気がして、そそくさと兵器庫へ向かった。兵科九十八名は二月ごろであったか、教育隊へ出て行ったと思う。後にシベリアへ入ってからの話だが、兵科の連中はハルビンから東へ五十キロくらいの阿城陸軍予備士官学校へ入校し、ソ連軍侵攻により終戦直前にソ連戦車隊の大襲撃を受け、破甲爆弾を抱え戦車に肉弾攻撃して、ほとんど全員が壮烈な戦死を遂げたと聞き、感無量となった。

まことに不思議な私の生死を分けた一期の検閲であった。連隊長講評で褒められなければ二名だけ合格の兵技候補生とはなれず、兵科の連中と同じ運命をたどったか、あるいは兵隊として残り、東満国境前線部隊としてどのようなようになっていたかわからない。

憶！ 六・一五同期戦没者のご冥福を祈る。

#### 兵技教育

私も兵技候補生二名は、三月に入ってからようや

く集合教育のため、東寧にあった二六三八部隊（野戦自動車廠）へ集合した。ここは兵器学校へ入る前、方面軍の技術部幹候前期集合教育隊ということであった。三十名くらいいたであろうか。まず候補生隊の兵舎に入り、温顔の候補生隊長浅野少尉が自己紹介、そして班長山崎軍曹、助教長島伍長が紹介され、各自寝台の場所が決められた。候補生の自己紹介もあったと思う。夕刻から集会所へ全員集まり、隊長八木中尉、技術教官大浦兵技少尉が紹介され、八木隊長が一席訓示の後、赤飯、尾頭つきが出され、一同会食となった。

会食中、八木隊長が立ち上がり、おれが一句歌うから皆も統いて唱和するように申し渡し、全員起立して「綏芬河小唄」なるものを隊長に続いて唱和したことが懐かしい。

花は桜木人は武士

尊き使命を如何にせん

見下ろす平野グロデコー

ソ連のトーチカほの見ゆる

その後、浅野少尉は兵科教練、大浦少尉は自動車教

育を担当、三カ月くらい在隊した。今覚えている候補生仲間は、六・一五同期の水野と古賀、河野、井熊、池辺、加藤、鷺巣、藤田、藤井らである。

さて、ここでの同志的一時集合教育の後、七月から全滿技術部幹候の本格的な兵技教育が実施されることとなり、六月二十五日過ぎ二六三八部隊と別れを告げ、それぞれ原隊へ帰り申告後、ハルビン香坊にある兵器学校（一三九九八部隊）へ入校することとなった。私の原隊七六三部隊（第十二師団輜重隊久留米輜重第十八連隊）は、既に大肚子川を撤去し羅子溝らしこう付近にあつたと記憶しているが、私と水野は徒歩で山中へ入り、部隊長に申告し直ちに下山した。原隊は一二四師団輜重隊となつていた。当時関東東軍の作戰計画は、往時の戦力はなく、満州を六戦区に分け、その一つ一つを島と見なし、ソ連侵攻の際は各島玉砕戦術で時間を稼ぐものであると聞いていた。いわゆる島嶼防衛と称していたと記憶している。

山を下り牡丹江へ出て二六三八部隊の仲間四名と落ち合い、当時私の父（実家——以下同じ）が軍属（酒

保主任）で牡丹江にいたのでその官舎へ押しかけ、母に無理を言つてごちそうをつくつてもらい、食物の乏しいときに満腹し、皆、入隊以来なかつた家庭の味に感激してハルビンへ向かつたことが懐かしい。

昭和二十年七月一日（？）、兵器学校（一三九九八部隊）へ入校した。五十年を経て、ここの教育は終戦までの極めて短期間であつたのでいろいろ記憶は薄い。私どもの区隊長は長易兵技少尉、中隊長は森中尉であつたと思う。終戦まで一カ月余、そこでどのような教育があつたのか、まるで思い出せない。

二六三八部隊から来た候補生も各区隊にバラバラとなり、私は、一区隊で寝台が隣り合わせになつた東北ずうずう弁丸出しの年配候補生佐藤善勝君（山県県東田川郡余目）が最も記憶に残っている。彼とはその後、海林（ハイリン）からネーベルスカヤまで常に幕舎が一緒だった。

さて、一三九九八部隊での教育も序の口、隊員の名前はほとんど覚えていない。

ソ連軍侵攻

八月九日早曉起床前、突然隊内スピーカーが鳴り、ソ連軍が国境を突破、各方面で日満両軍が遊撃戦を展開、激戦中と報じた。直ちに非常呼集がかけられ全員営庭に集合、週番士官から非常事態を改めて伝達され、身辺整備をして次の命令あるまで内務班で待機せよということになった。今まで戦地は遠いかなとは思っていた候補生も一兵士として覚悟を固め、銃をとらねばならぬこととなった。その日から射撃場で実弾射撃演習を全員が実施、絶え間なく続く射撃音からいよいよ来るべきときが来たという緊迫感が漂ったが、さして動揺はなかった。

私の区隊は、教育隊から余り遠くない郊外にタコつぼを掘り展開した。夜間は近くにあるどこかの杜宅であろうか、そこを動哨したが、入居の奥さんから、「兵隊さんが見回ってくださるので安心して眠れます。ありがとうございます」と礼を言われた。私もみたいな頼りない兵隊にと思い、いささか面映い気がしたが、当時はだれしも無敵關東軍を信じていたのであり、無理はない。その間、戦争といってもソ連機の空爆も

なく、うそのように静かな六日間が過ぎた。八月十四日、今日か明日、ソ連の空挺部隊がこの辺に降下するか、戦車隊が襲ってくるかどうかともなく情報が流れ、皆緊張した。

十五日朝、タコつぼに散開しているところへ本部伝令が来て、本日正午、重大放送があるから営庭に集合せよとのことであった。何事だろうと昼前全員、続々と営庭に集合した。正午に玉音放送があると告げられ、据えられた大拡声器から玉音が流れたが、雑音が多く、全くと言ってよいほど聞き取れなかった。放送終了後、部隊長から改めて終戦の玉音放送であった旨を告げられ、今後どのようなことが起ころうが、皇軍の襟度を持って軽挙妄動を厳に慎むよう一場の訓示がなされた。区隊付下士官小笠原軍曹がワツと泣き伏したことを今でもよく思い出す。私は感情の起伏をすぐあらわすことのできぬ性格であるが、しばし茫然、気合が抜けたという感じであった。私にとつては、実弾を撃ち合っただけでもなく、大命による停戦であり、敗戦を直観できなかったわけであるが、その後のシベリア長

期抑留の暗黒、また敗戦後の占領軍による日本弱体化、伝統精神の破壊をこのとき直観できたならば別の激情が生じたであろうが、私は小笠原軍曹のように、すぐに激情ほとばしり泣くことはできなかった。愛国心の強い純粹多感な軍曹は、無敵不敗と信じた日本の敗戦が何よりも悲しく、抑え切れなかったに違いない。その後の消息は知らない。

#### 停戦後

残念感とともに安堵感の交錯する複雑な気持ちで兵舎へ帰り、何もすることなくしばらく過ごした。

この間、候補生全員営庭に集合し、甲幹と乙幹の発表があり、私は甲幹に読み上げられた。今さら何だと思つた。負けた実感はその後も余りわかかなかつた。時折ソ連軍の戦利物資の積み込み使役に駆り出される者もあつた。いつこの部隊が武装解除されたかは覚えていない。その間、皆からタコ八(名前は覚えていない)とあだ名をつけられていた部隊長が、何をもつて独り決めたのか、この教育隊は半年くらいここで籠城するため糧秣を極力節約し当分一日二食とすると命令を

出し、朝晩二食、おかずは何もなく、毎日毎日トウガンのしょうゆ汁のみであつたことが今最も記憶に残っている。皆、栄養不良で消耗したことは言うまでもない。夏ばてとともに腹が減りヘトヘトで、なるべく動かさず、故郷へ帰る話のみを楽しんでいた。

八月末近くまでこのようにしていたであろうか、突然、身の回り品のみ持つてハルピンの駅に近いところへ移動させられたように思う。半年籠城と言つて惜しみ残した食糧をそのままソ連に没収されたのはばかげており、まことに残念なことであつた。

このタコ八部隊長、今度は移つたところで候補生に毎日敬礼演習をするように命令した。すなわち、今祖国は悲運に見舞われているが、君たちは皇軍幹部として近き将来必ず日本再起のため頑張らねばならぬ時が来る、そのときに備えて一日たりとも弛緩してはならないということだつた。今考えればかばかしいことであるが、我々もそのときはまじめにそう思い、命令に従つて毎日敬礼演習をしていた。

ここに五、六日いただらうか、全員乾パン十袋くら

い支給され、ハルビン駅から無蓋貨車に乗せられた。駅では続々到着するソ連軍兵士を見た。それでようやく敗戦の実感がわいてきた。貨車は東へ走り出した。少し行くと雨が降ってきた。だれかが「勝利の日まで、勝利の日まで——」と哀愁を込めて歌い出した。皆唱和した。雨と涙に頬を濡らし、ずいぶん長く歌った。途中山中で殷々たる砲声が聞こえた。まだ停戦を知らぬ将兵が戦っていたのであろうか。突然停車した。護衛兵に下車を命ぜられた。伝令が、鉄道破壊のため目的地まで行軍すると伝えて来た。二道河子という駅名が記憶に残っているが、どこでおろされたのかは覚えていない。

一日二食、トウガン汁給与の栄養失調、かつ夏ばての重い足を引きずり、野宿しながら歩いた。そのうち、身につけているあらゆる物がすべて重くなってきた。上着を捨て、ズボンを捨て、シャツも邪魔になりパンツだけになり、大切な食糧、乾パンまで捨ててしまい、先に行った者がほうっていった落ちていた乾パンを拾い、食いながら歩いた。死の行軍とはこのようなこと

を言うのだろうか。苦しい。へたばってついてこれない者も出る。皆、自分一人歩くのが精一杯で、手を貸すどころではない。

その我々の苦しみに追い打ちをかけるように、ソ連兵の「ダワイ・スカレー」の罵声が飛ぶ。のどが渇く。水たまりがあれば争って泥水をすする。臭いので周りを見ると、近くに軍馬が倒れ、口から鼻からウジがわいている。しばらく行くと、路傍に見習士官が制服のまま倒れ、やはりウジがわいている。瀕死の半病人のように歩く私どもは、もう何を見ても不思議に感動がわかない。ただ無意識に歩いていた。何日くらい、どれくらい歩いたのだろうか、これも全く覚えがない。ようやく鉄道施設か何かがあったところであろうか、大樹の茂る赤れんがの建物のところへ着いた。先着者がいる。衣服もまともで、飯ごうで何か炊いている者もいる。知った顔もあるから一三九九八部隊の先着者だったのかも知れない。ここで食物が支給されたように思うが、思い出せない。しばらく休んだ後また歩き出して、ここから余り遠くない海林收容所へたどり着



いた。どんな格好で到着したか、恐らく裸のミイラの行列のようであつたろう。かくして死の行軍は終わった。

## 海 林

海林収容所は小高い丘が幾つもあり、随所に掘つ立て小屋が建てられ、何千何万の日本兵が収容されてうごめいていた。聞くところによると、ここが日本へ帰る中継集結地なのだそうだ。その小屋へ私たち候補生が分散して収容され、まず一息ついた。私は前述、山形県余目出身の年配者、佐藤候補生と同じ小屋の隣同士となつた。衣服（日本軍のもの）も支給された。

食糧はどのように分配されたか忘れたが、黒パン受領に行つた記憶がある。大収容所のあちこちに細々と煙が立ち上り、丘に生えているノビルなどを取り、思い思いに煮炊きしていたのは杜撰であつた。

収容所のさく外へ時折満人が、シヨウビンやマントウを売りに来ていた。金のある兵がさく越しに買っているのを見てうらやましく思った。当時まだ満州国紙幣が通用していた。あるとき東寧二六三八部隊の戦友

であつた藤田候補生が、どこから仕入れてきたのか、大豆を芳しい香りを発散させて煎っていた。周りの人は皆うらやましそうに見ている。一三九八部隊への途中、牡丹江では私の家で彼も歓待された一人だつたから、当然分けてくれるものと思つて手を出したら、何と物すごい顔をしてにらみ、しかも飯盒を後ろに隠すではないか。このことは終生忘れ得ぬものであり、その顔を今もはっきり覚えてゐる。早稲田理工出の秀才もかくのごとく貧すれば食す。こんなやつばかりではなかつたが、極限状態の人の心のいかにあさましきことか、荒涼たる思いに駆られたものである。

そのような惨めな収容所生活をしながらも、近くの引込線から次々帰国（？）の貨車が出て行くといううわさを聞き、私どもは唯一の希望をつないでいた。海林生活は二カ月くらいであつたろうか、十二月初旬に私も貨車に乗る順番が来た。日時は定かではない。収容所を出て近くの引込線に待機中の貨車に詰め込まれた。皆、横になつて隣同士、帰国の話で持ち切りであつた。その後、ウラジオストクから祖国へ帰る夢が

はかなく消え、シベリアへ拉致されて苦難の抑留生活が始まることは皆大同小異であった。

### シベリア

ウラル山脈方面で半年くらい伐採作業をしてから帰国すると言つてだまされ、牛馬以下の貨車輸送で、着いたところはバム鉄道起点タイセットから少し入ったネーベルスカヤ収容所、ここで初年度越冬、この冬の食事は最低であった。コウリヤンのふすまや原穀のアワを食わされ、皆ふん詰まりを起こし、ひどい者は衛生兵が針金を曲げてほじり出していた。栄養失調の犠牲者も多かった。私も足が重くて上がらず、小さい段差でもひっくり返った。つい昨日までパンをかじっていた者がいつの間にか死んでいたとか、木の下敷きになって死んだ伐採仲間の人肉を焼いて食つて銃殺された者があつたという話もこのころであつた。翌春四月、帰国だと希望を持たされて、アンガラ川を汽船でさかのぼりブラーツク収容所へ回された。ここではアメーバ赤痢にかかり、ブラーツク病院で約一カ月入院した。ここは伐採が主であつたが、秋には農場でカルトーシ

カ収穫作業に出た。そのとき、旅順で捕虜になり松山収容所にいたという老農場監督に会う。彼の話は特筆すべきものと思うので記しておきたい（通訊あり）。

「私の今までの一生で一番楽しい思い出は捕虜になつて松山にいたときだ。米が毎日であり、新鮮な魚や肉、そして野菜をたくさん食わせてくれ、作業らしいこともせず、いつも温泉へ入れてくれた。帰るときは捕虜全員が新しい背広二着ずつと、いろいろお土産をもらった。日本人は皆親切だつた。それに引きかえ、おまえたちはひどい目に遭い、食事も貧しく本当にかわいそうだ」と。彼は五日間の収穫作業の間、毎日我々にカルトーシカをゆで、腹いっぱい食べさせてくれた。あの当方で六十半ばくらいであつたらうか、ひげの濃い彫りの深い顔だちで、大きな体の好人物だつた。あれから既に五十年近くになる。あの世から彼は懐かしがつていた日本へ遊びに来ておられるであらう。合掌。

その冬（二十一年）はブラーツク・ラーゲルで暗い正月を迎えた。春になつてタイセットへ向け下り、四ラーゲルへ移つた。昭和二十二年の四ラーゲルは、

民主化運動、つるし上げ、生産競争などの花盛りだった。また、この年の十一月から十二月にかけて特に糧秣が悲惨であった。カーシヤに穀類が入らず、大根スープやエンドウがわずか底に沈んでいるスープばかりが続いた。重い足を引きずって作業に出た。そのころ、ようやく土盛りも終わった鉄道路盤にすぐ枕木を置き、満鉄から持ってきたというレールを敷き、しばらくすると汽車を通す。このようだから脱線は日常茶飯事であり、脱線するたびに昼夜構わず脱線揚げに駆り出された。このころ貨車の荷おろし作業にも出た。パン粉を盗んで生のまま水で飲み込み、腹がパンパンに張って苦しんだり、塩漬けのマスをかすめ取り生食し、のどが渴き胸が焼け苦しんだことがあったのもこのころだ。食糧のおろし作業はかくのごとく、かすめた物をズボンに隠して持ち帰るが、衛兵所で巻き上げられることが多かった。抑留生活はまさに食いの餓鬼道であった。

#### バカマネ帰国

私は二十二年のエタップにも漏れ、またこの冬を越

さねばならぬかと思うとたまらなかった。このころはもう入ソ当時の純粹さも消え、ソ連共産主義の大うそ民主化運動のからくりにも踊らされるむなしさを嫌というほど味わい、もう何でもいい、一日でも早く生きて祖国へ帰らねばならないと、寝ても覚めても思い続けていた。そして考えついたのが、仮病を使って入院し、帰ることだった。早速大芝居を実行に移した。

十一月末、小便に行くふりをしてシャツのまま零下二〇度にもなる屋外で衰弱した体を冷やして寝ることを三日くらい続けた。作業にも出た。たしか三日目くらいには発熱しており、パンも何も食わなかったと思う。四、五日後には私は三〇三病院の寝台で寝ていた。相当高熱だったので運び込まれたのだ。入院後一日熱が続いたが、夜になると下がり出した。入院できたことはしめたとは思ったが、そこで私はまた芝居を打たねばならぬと考えた。「平熱に戻ればまたラーゲルへ戻される。せつかくここまで来てそんなことができるか、バカマネをしてやろう」と決心した。隣の寝台の人（野口少佐）がだれかに言っていた。「この人は物

すごい高熱で入ってきた。今熱が下がってきたようだが、何を言っても物を言わない。耳が聞こえないのではないかな」と。私の体温をはかりに来た看護兵（日本人）が三七度五分に下がったと言った。「気分はどうですか」と言っても、私は沈黙戦術に徹することにしました。熱で頭がおかしくなったことにしよう、それ以外にない。

食事が出たら私はわざとひっくり返して食わなかった。回数にはむらがあつたが、三分の一は食わずにパンをほうり投げた。同室者はそれを喜んで拾った。たまには野口少佐の物を分捕つて食つた。しかし、ほめるのが余計であるからだれも文句は言わなかつた。あるときは、持ってきた菓をまき散らした。室に置いてあつた薬瓶を割つた。しかし、物を言わぬことは実につらかつた。時々、わざとひとり言を言つてみたり、便所へ行って大声を上げた。このような境遇のとき、互いに故国へ帰つてからの話や昔の話、ぜんざいやおはぎの話が何より楽しかつたのだ。しかし我慢した。

三月に入つて病院からのエタツプ検査があつた。私

にはわからんだろうと思つてか、看護兵が連れに来た。これだけは通らねばならぬ。

軍医が二人いた。一人は日本軍医、一人はソ連人女医だつた。彼女はほとんど日本軍医に任せていた。私の病名は脳神経障害となつていた。私はわざとポカんと口をあけ日本軍医の前へ出た。静岡医大を出た（高砂丸に乗つてから聞いた）とかその軍医は、私の目を見てニタツとしたような気がしたが、何も言わずに帰国組に入れてくれた。今思えば、わかつていて通してくれたのであり、私の大恩人と言える。

その後、二二ラーゲルからタイセットのシベリア本線の近くにあるエタツプのラーゲルへ入り、十月になつてやつと列車に乗せられナホトカに着き、十月末、高砂丸乗船まで私は沈黙を通した。苦しかつたが、それでも戦友がスクラムを組み、赤旗の歌やインターナショナルを歌い、また何の集合があつても一切出ずに通すことができた。三年前「勝利の日まで」を歌つた日本兵が、帰るためとはいえ赤旗を振りインターナショナルを歌うとは――。

## ついに祖国へ

いよいよ高砂丸に乗船し、棧橋が外され船が動き出し、初めて私は口を開いた。周りの者は皆「やはり」と言ったが、もう祖国の船なのだ。だれ一人何も言わなかった。

復員業務が始まった。書類とともにせんべいとお茶が出た。このときはまだ静かだった。しかし、食事が出たときだった。民主運動のアクチーブ二人が、「この飯一杯にだまされるな、吉田反動内閣にだまされるな」と触れ回った。私は「こいつらに日本の飯を食わすな」と叫んだ。アクチーブは沈黙し、飯を食えなかったはずだ。

十一月二日、私どもは夢見た懐かしの祖国、ありがたい日本の国の土を踏んだが、私は乗船者名簿に脳神経障害とあり、舞鶴国立病院へ入れられ、約二週間くらい遅れて金沢駅へ着いた。

肉親一同と町内会の人々が迎えに来ていた。そのとき母（※養家——以下同じ）の言われた言葉を今も思い出す。何で私がおくれて帰るのか、県の世話課へ聞

いたら、「おたくの息子さんはお気の毒だが少し頭がおかしくなったらしい」と言われたそうだ。「心配だったが、少しぐらいおかしくても生きて帰ってよかったですと思って迎えに来た。でも思ったほどでなくてよかった」と。

それからまた、家へすぐ帰してもらえず、出羽町の国立病院へ入れられた。私は担当の女医さん、伊藤先生や同じく由雄先生にバカマネで帰ったことを話し、すぐ帰ると申し上げたところ、「わかりました。でも長い間ご苦労さまでしたので、ここでは官費で休養するつもりでいてください」とやさしく言われ、年末近くまで病院に置いていただき、その間休養しながら、ゆっくり戦後の日本の様子も少しは勉強でき、次の就職先まで決めることができた。

## 帰国後編

さて、大分長くなり恐縮だが、ここでやめれば「帰国後の労苦」というテーマご指示を一切無視することとなり、申しわけない。そこで、テーマに沿うとは言えないかもしれぬが、関連していることとして、シベ

リア強制抑留のために起因したその後の人生行動について、最初の就職から少しだけ述べてみたい。

それは、ソ連抑留体験から生じた反共信念と祖国愛を常に行動の原点として、我が人生の目標、生きがい、情熱を持つことができるようになったと言えるのである、折に触れ、利益にもならぬことにかかり果てることは、他人から見ればまことに苦勞なことと見えるらしいから、強制抑留によって引き起こされた労苦話の一つとしてお聞きいただきたい。

さて、帰国後はまだ食糧事情が悪いころであり、年内いっぱい国立金沢病院で休養させていただき、病院を旅館がわりに一カ月半、骨休みができた。

思えば、帰るためとはいえ約一カ年、ガラワバルノイ（脳神経障害）を装い無言の行をしたその苦しき夢のごとく、お陰でこうしていられることはまことにありがたかった。病院を根城に家へ帰って懐かしい人々とシベリアのこと、内地のこといろいろと語らい、戦災も受けぬ昔のままの町を歩き、友人を訪ね将来を論じ、思いのままの時を過ごすことができた。

また、肝心の職を探すことも心がけ、町を歩いて目につく求人張り紙があれば面接に入り、すぐ来てくれと言われたところも二、三あったが、父（養父・昭十五年没）が役人であったこともあり、母は官吏を望み、ちよどそのころ新聞に出ていた北陸財務局国税徴収官の募集広告を見て勧められ、自信はないが応募となった。

試験は十二月中旬であった。科目は、憲法、民法、時事経済、小論文の四つであったと記憶している。シベリアの山から出てきた猿のごとく、そしてその道の経験も学もない私が初めからできるはずもなく、合格するわけもなからうと楽な気持ちで試験場に臨んだ。引揚者、復員者がワンサと押しかけていた。四、五百名もいたであろうか。案の定何もわからず、恐らくトントンカンな回答したのであるが、ただ一つ小論文のテーマが「我が文化国家観」でなかったかと思うが、これに私は最大限の努力を傾けた。すなわち、在ソ三カ年の労苦をかいつまみ、ソ連恐怖政治の現実と、共産主義が決して日本の文化土壌に合うものでないこ

とを、ソ連強制抑留帰還者の血のにじむ声として記した。

これがよかったとしか言いようがない。合格するはずはないと思っていたのに、翌春早々であったか、採用通知をもらった。母の喜びはひとしおであった。

## 応召抑留手記

大阪府

いまいげんじ  
(今井源治)

### 赤紙召集

「もしもし、おとうさん……召集の……赤紙が……来ましたよ……」息をつめた妻の電話に、あ、と唾をのみ、

「よし、わかった」

と私は電話器を置いた。

そのとき姉の家にいた私は、その隣の従兄の弥太はんにその朝、召集が来たことを聞いたばかりだった。

赤紙が舞い込んでから入隊まで、たった二日の余裕しか与えられていなかった。その二日間に、稼業の整理、身辺の整理、それはもう不眠不休の二日間であった。

夫婦が語らう暇もなく、千々に乱れる両親の心も知らず、キヤーキヤー騒ぐ幼い我が子たちの声にもキューンと胸がいたむ。

長男の孝は六歳半、国民学校一年生、長女に加奈子は満四歳、次女の睦子は一歳半、かしこい子だが、まだ歩けない。妻は妊娠中、そしてその母。私が戦死すれば、これが今生の別れなのだ。

明くれば一九四三年七月二十四日、大阪の夏で一番暑い天神祭の宵宮の日、私はスフの国民服に赤だすき、坊主頭に奉公袋をぶらさげて、二十三部隊の営門をくぐった。

炎天下の営庭で裸になって身体検査。なれぬ手つきで針を持ち、一つ星の襟章を軍服に縫いつければ、いよいよ陸軍二等兵。教練だ、駆足だ、軍歌演習だ、飯上げだ、清掃だ、点呼だ、なんだかんだ、何が何やら